

金楽寺の地名の由来

金楽寺という寺は実在しませんが、どこからこの地名がついたのでしょうか。

これは吉備真備の建てたという「錦楽寺」から来ていると言われていています。吉備彦神社東隣の「金楽寺愛郷会館」の玄関脇にある小さな祠が、その「錦楽寺」の唯一の名残りです。『摂津名所図会』には、「錦楽寺村にあり、もと吉備公の創したまふ錦楽寺の旧跡なり。鎮守ばかり存して、この所の生土神とす。」との記録があります。(2頁目文献赤枠の箇所)



吉備真備は、持統七年(西暦693年)年頃、備中国(岡山県)に生まれたと伝えられる、学者・政治家・最高の知識人です。霊亀三年(西暦717年)年入唐し、天平七年(西暦735年)年に日本に戻りました。経書、史書を初めとして、天文、暦法、音楽、兵法などの新しい知識を習得した天才で、学者から大臣まで進んだのは菅原道真と真備だけです。

錦楽寺と吉備彦神社

真備が唐土を錦の袋に入れて持ち帰り、長州の地の中央に、錦楽寺を建立したと言われていています。土地の人は寺の脇に「一品天神」として真備を祀りました。のちに寺は廃れましたが、真備を祀った祠のほうは残って、これが吉備彦神社となりました。

スーパーマン真備

神社で目立つのは、正面上部にある3枚の奉納絵馬です。真ん中の絵馬は、入唐間絵図。真備の入唐中の出来事を、大江匡房(おおえのまさふさ)の『江談抄』にもとづいて描かれたものです。作者はおそらく江戸時代の絵師と考えられますが、現品は「皇紀貳千六百年」とあるので、昭和15年頃の模写品と思われます。元の絵馬が朽ちたので復元したのでしょうか。至高の宝といわれるボストン美術館所有の「吉備大臣入唐絵巻」も『江談抄』をもとに描かれましたが、吉備彦神社のものは幽霊を描くなど、独特の表現が特徴です。

この絵馬には真備が唐で様々な難関に立ち向かい無事に帰国を果たす様が描かれています。『真備は諸道・諸芸に秀でていたので、それを嫉んだ唐人は彼を殺そうとし、鬼の住む楼閣に幽閉されるが、阿倍仲麻呂の亡霊救われた場面』や、『「文撰」「野馬台の誌」の解説の場面』、『囲碁の勝負などを課せられるが、霊の援助や、蜘蛛のひく糸によって勝ったという話の場面』等です。

囲碁対決では、真備は相手方の黒の碁石を1個呑み込んでしまいます。怪しんだ唐人は「かりろぐ丸」という下剤を飲ませますが、真備は術を使って腹中に黒石を留め、下痢便にも碁石は見つかりません。悪臭に顔をゆがめつつ下痢便を調べる唐人達…この他にも『江談抄』には飛行の術を用い空中を飛ぶ真備と赤鬼の話など、面白い創作逸話があります。身近な歴史文化の奥深さ、面白さにびっくりですね。



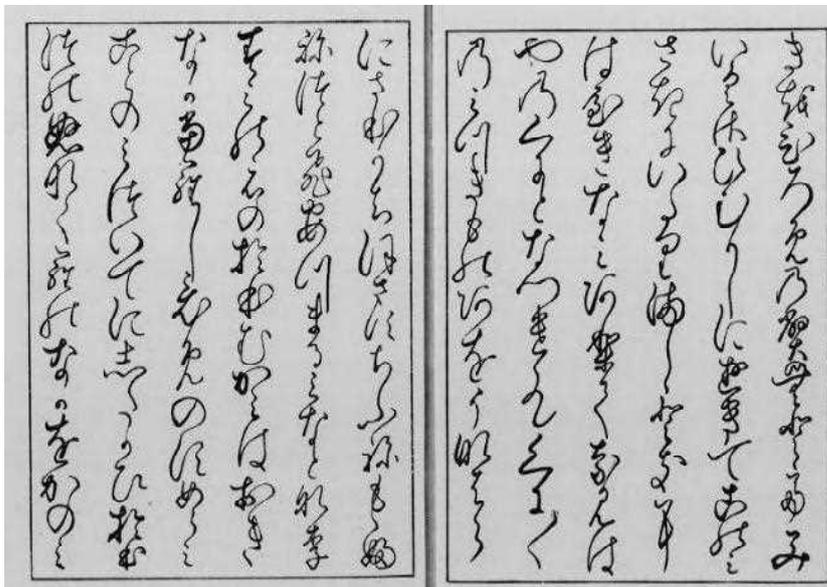


頼光 酒吞童子
退治図

境内図 1852年奉納 ↑真備 入唐間事図

『撰津名所図会』

京都の町人・吉野屋為八が計画。1796年(寛政8年)~1798年(寛政10年)年に刊行された撰津国の通俗地誌。観光案内書でもあった。9巻12冊。



錦楽寺村および錦楽寺の記載箇所

↑大正8年 翻訳本 原田幹
(国会図書館蔵 各図版はデジタルライブラリにて閲覧)